

# 復活者イエスの挨拶

## Greetings of the Resurrected Jesus

前川 裕

Yutaka Maekawa

キーワード

福音書、復活物語、挨拶、「平安あれ」

### KEY WORDS

Gospels, Resurrection Narrative, Greetings, “Peace be with you”

### 要旨

イエスが復活後に女性たちや弟子たちに出会った際、挨拶をする。これらの挨拶は、福音書によって表現が異なっている。これらの挨拶の内容や状況を検討し、そこにどのような意味が込められているのかを考察する。

復活後のイエスの挨拶については、マルコ福音書を除く三つの福音書が言及している。これらを、単なる挨拶と解釈する説と、特別な宣言とみなす説がある。後者とみなす研究が多いが、前者に該当することを支持する例を、新約聖書およびヘレニズム書簡の用例から検証した。

そもそも、このイエスの挨拶の言葉は史実とは言い難い。この挨拶は、イエスはその死の前後で変わらないこと、つまり死と復活の後でも変わらないことを示すために、復活物語に日常的な挨拶を書き込んだと考えられる。それは、イエスの肉体性が十字架死の前後で「変わらない」ことを示すためのものである。であれば、「平安あれ」のような宣言ではなく、むしろ通常の挨拶の意味として理解すべきものということができる。

## SUMMARY

In the three Gospels aside from Mark, Jesus greets women and disciples when he meets them after his resurrection. The wordings of these greetings are different among the three Gospels. Here we examine the situations and content regarding the greetings to investigate their meanings.

There are mainly two explanations: 1) they are just usual greetings in the time of Jesus, and 2) the statements contain something special. Although the latter has some broad support, we find examples that support the former from the New Testament documents and the Hellenistic letters.

In fact, we cannot prove the historicity of these greetings of Jesus. Everyday greetings are written in the Resurrection narrative to show the steadiness of Jesus, namely, he has consistency before his death and after his resurrection. These greetings try to show that Jesus never changed before/after his crucifixion. Therefore, these greetings should be understood as common greetings, not as special statements.

## 1 問題設定

イエスが復活後に女たち／弟子たちに出会った際、挨拶をする。これらの挨拶は、福音書によって表現が異なっている。これらの挨拶の内容や状況を検討し、これらの挨拶にどのような意味が込められているのかを考察する。

実際、これらの挨拶には種々の問題がある。復活物語の中に含まれたものであり史実性を問うことができないという点、またこのような「挨拶」そのものにどれだけの意味が込められているのか、つまり福音書記者はなぜそれらの挨拶が必要と考えたのか、という点などである。これらの問題を検討することは、福音書記者の思想を理解するための助けになると考えられる。後述するが、これらの挨拶の福音書間での違いや比較検討はそれほどなされてこなかった。この点で、本研究は意義があることになる。

## 2 本文

復活後のイエスの挨拶について記録しているのは、マルコ福音書を除く三つの福音書である。マルコには復活記事がない(16:8で終わっている)ため<sup>1</sup>、当然ながら復活のイエスの挨拶も含まれていない。以下では、3つの福音書における記述を検討する。

## 2.1 マタイ福音書

28:9 και ἰδοὺ Ἰησοῦς ὑπήντησεν αὐταῖς λέγων· χαίρετε.

- ・「おはよう」（新共同訳、協会共同訳、新改訳2017）
- ・「平安あれ」（口語訳）
- ・「幸いあれ」（田川訳）<sup>2</sup>
- ・「喜びあれ」（岩波訳）
- ・“Greetings!”（NRSV）

χαίρετε は χαίρω の命令法2人称複数形で、直訳すれば「健康であれ」「元気であれ」という意味となる。一般的な挨拶の言葉として用いられ<sup>3</sup>、とりたてて特別な表現ということはない<sup>4</sup>。マタイの文脈においては、女性たちがイエスの墓から弟子たちのもとへと急ぐと、イエスが行く手に立っていて、彼女らに挨拶をする。新共同訳・協会共同訳・新改訳2017は一般的な挨拶として、ことの起こった時間（早朝）に合わせて「おはよう」と訳出している。口語訳や田川訳は、元の挨拶と考えられるヘブライ語「シャローム」の意味を踏まえて訳出しているが、χαίρω そのものにはそこまでの意味はないため、訳しすぎと言って良いだろう<sup>5</sup>。

## 2.2 ルカ福音書

24:36 Ταῦτα δὲ αὐτῶν λαλοῦντων αὐτὸς ἔστη ἐν μέσῳ αὐτῶν καὶ λέγει αὐτοῖς· εἰρήνη ὑμῖν.

- ・「あなたがたに平和があるように」（新共同訳、協会共同訳）
- ・「平安があなたがたにあるように」（新改訳2017）
- ・「やすかれ」（口語訳）
- ・「平安、汝らにあれ」（田川訳）<sup>6</sup>
- ・「あなたたちに平安〔あれ〕」（岩波訳）
- ・“Peace be with you”（NRSV）

直訳すれば「平和があなたたちに」となる。一般的には動詞 εἰμί を接続法現在の形で補い「～があるように」と訳出することが多い<sup>7</sup>。ルカの物語では、墓から弟子たちに向かう途中にはイエスは現れないため、そこでイエスが挨拶することはない。イエスが挨拶をするのは、エルサレムにおける家の中で弟子たちに出会う時である。扉を開けることなく突然家の中に現れたイエスは、弟子たちに対して挨拶をする。

この挨拶については、本文批評上の問題がある。つまり、ルカには本来存在しな

かった可能性がある<sup>8</sup>。それはこの挨拶がD写本と古ラテン語訳<sup>9</sup>に欠けているからである。しかし、重要な写本にはほぼ含まれている（ $\mathfrak{P}^{75}$ ,  $\aleph$ , A, B, K, L, X,  $\Delta$ ,  $\Theta$ ,  $\Pi$ ,  $\Psi$ ,  $f^{13}$ ほか）。これをどのように説明すべきであろうか。以下の通り、いくつかの説が立てられている。

1) ヨハネに由来するものとみなす

ダウアー<sup>10</sup>は、これはヨハネ20:19の挨拶に由来するものであるという。LXXにも見られるものであり、福音書記者に由来するものか資料に由来するものかの判断は難しい。そもそもヨハネ20:19の挨拶は伝承に由来するものであり、福音書記者がイエスの口に入れたと考えられるが、それは告別説教における約束を成就するためのものであった。福音書記者は20:21とおそらく20:26にもそれを書き入れたという。

2) ルカへの付加と考える

キャロル<sup>11</sup>は、ルカにおける弟子たちの混乱を理解するには、もともと36a節にはイエスから直接に平和の挨拶はなかったとみればよいという。この付加は、後の写字生がヨハネ福音書との整合性をつけようとしたためであるとする。

3) 共通の伝承とみなす

この立場をとる研究者は多い。オマンソン<sup>12</sup>は、これがヨハネ20:19から取られたと考える解釈者もいるとしつつ、ルカとヨハネは受難・復活についての記述では共通部分が多いため、共通の伝承を用いただけであろうと考える。またこの句が存在する写本の支持も強いという。フィッツマイヤー<sup>13</sup>は、ヨハネ20:19と逐語的に一致することだけからルカの本文に入り込んだ註とは見なせないと考え、ルカとヨハネが共通の資料を用いていたのだらうとする。エドワーズ<sup>14</sup>は、ベザ写本（D写本）はイエスの挨拶（36節）を削除したと考える。これはヨハ20:19に合わせるための後代の写字生の付加であるとする学者が多いが、ありうるとはいえ確実ではないとする。この挨拶は多数派写本（Majority Text）伝承によって証言されているものである。「平和があるように」はセム語で一般的な挨拶表現であり、この文脈にもふさわしいものである。また「平和」はルカにおいて「救い」の意味もあり、ここでは二重の意味でふさわしいという。ともあれ、ルカとヨハネは受難・復活物語で共通点が多いことを考えると、相互の依存関係よりも、両者に共通の伝承があったとみなすのがよい、とする。ヴィルケンス<sup>15</sup>も同様にルカとヨハネは共通の伝承を用いたと考えており、また復活顕現物語は段階的に拡大されてきたと考える。

## 4) ルカ内部での依存関係

ルカ10:5には「どこかの家に入ったら、まず『この家に平和があるように (εἰρήνη τῷ οἴκῳ τούτῳ)』と言いなさい」という指示があり、これとの関係を指摘する研究者もいる<sup>16</sup>。ダウアーはここから、これはQ由来であるとするが、10:5も前ルカ的なものであるという<sup>17</sup>。またノランドも10:5とのつながりを指摘する<sup>18</sup>。

写本証拠からは、 $\mathfrak{P}$  75 (3世紀) に存在していること、古ラテン語訳には欠くものの、シリア語訳・コプト語訳といった他の重要な古代語訳には含まれること、また挨拶がある方が文脈からみて自然であることから、もともとルカ福音書のこの部分にはイエスの挨拶があったとみるのがよいと思われる。

## 2.3 ヨハネ福音書

20:19 Οὐσης οὖν ὀψίας τῇ ἡμέρᾳ ἐκείνῃ τῇ μιᾷ σαββάτων καὶ τῶν θυρῶν κεκλεισμένων ὅπου ἦσαν οἱ μαθηταὶ διὰ τὸν φόβον τῶν Ἰουδαίων, ἦλθεν ὁ Ἰησοῦς καὶ ἔστη εἰς τὸ μέσον καὶ λέγει αὐτοῖς· εἰρήνη ὑμῖν.

20:21 εἶπεν οὖν αὐτοῖς ὁ Ἰησοῦς πάλιν· εἰρήνη ὑμῖν· καθὼς ἀπέσταλκέν με ὁ πατήρ, καὶ γὰρ πέμπω ὑμᾶς.

20:26 Καὶ μεθ' ἡμέρας ὀκτῶ πάλιν ἦσαν ἔσω οἱ μαθηταὶ αὐτοῦ καὶ Θωμᾶς μετ' αὐτῶν. ἔρχεται ὁ Ἰησοῦς τῶν θυρῶν κεκλεισμένων καὶ ἔστη εἰς τὸ μέσον καὶ εἶπεν· εἰρήνη ὑμῖν.

- ・「あなたがたに平和があるように」(新共同訳、協会共同訳)
- ・「平安があなたがたにあるように」(新改訳2017)
- ・「安かれ」(口語訳)<sup>19</sup>
- ・「平安、汝らにあれ」(田川訳)<sup>20</sup>
- ・「あなたたちに平和」(岩波訳)
- ・“Peace be with you” (NRSV)

3箇所と同じ表現が繰り返されている。直訳はルカの場合と同様に、「平和があなたがたに」となる。文脈としては、20:19でイエスがエルサレムにいる弟子たちのところに現れて挨拶をする。イエスは20:21でも繰り返し挨拶をする(ルカと異なる部分)。また20:26はトマスも含めた弟子たちが集まっているところに、イエスが現れて挨拶をする。これは20:19の単純な繰り返しと言ってよいだろう。

なお、ヨハネ福音書においてイエスの墓を見に行くのはマリアのみであり、そこで

イエスとマリアは出会い、イエスが声を掛ける(20:15)ものの、イエスは挨拶の言葉を発していない。また弟子たちのところに行く際にイエスに出会うこともない(20:18)。

### 3 先行研究

これらの挨拶に関する先行研究をまとめておく。

マタイ福音書については、基本的に通常の挨拶とみなされる<sup>21</sup>。しかしここに特別な意味を見出そうとする研究者もあり、たとえばノランド<sup>22</sup>は直前の2回(ユダの裏切り、兵士たちの嘲り)において誤った用いられ方をしている *χαίρω* がここで「回復される」という。またオズボーン<sup>23</sup>はこの挨拶には二つの意味があり、一つはイエスの明るい挨拶、もう一つは女性たちの大きな喜び(cf. 28:8)が反響しているという。

ルカ福音書についてはすでに2.2で言及したのでここでは省略する。

ヨハネ福音書では、ヨハネ14章および16章との関連を述べるものが多い。たとえばまたマイケルズ<sup>24</sup>は告別説教(14:18, 27, 16:33)が反響しているとし、ダウアー<sup>25</sup>は14-16章に述べられた「贈り物」への答えではないかという。ツムシュタイン<sup>26</sup>やハイル<sup>27</sup>は、ここでの「平和」は14章を受けたものであり、14章における待望が現実となったことであるという。

さらに、先行研究のうち、特に「挨拶」そのものに言及したものを以下にまとめる。

#### 3.1 通常の挨拶

これらの挨拶のうち、特にルカ・ヨハネのものを通常の挨拶と見なす見解は比較的少ないといえるだろう。オマンソン<sup>28</sup>は通常のセム語的な挨拶で、この場にもふさわしいとする。またヘンヒェン<sup>29</sup>は、ここでの「平和」はヘブライ語「シャローム」のことで、「健康、救い」といったあらゆる内容を意味するという。ドッド<sup>30</sup>も、ギリシャ語 *χαίρετε* はギリシャ語の普通の挨拶、*εἰρήνη ὑμῖν* もヘブライ語ないしアラム語では普通の挨拶であり、背後にアラム語伝承があると考えればこの二つは同じものであるとみなす。バーナード<sup>31</sup>は、この挨拶は東方において部屋に入る時の普通の挨拶であって、ここでもそのように用いられているが、特に厳粛な感じを出すように用いられているとする。またトンプソン<sup>32</sup>は、伝統的な平和の挨拶を用いることで、弟子たちの恐れを和らげようとしたとみなす。

### 3.2 特別な意味

他方、ここでの挨拶には特別な意味が含まれている、という説明が数多く試みられている。例えば以下のようなものがある（なお、ルカとヨハネで同じ言葉であるため、両方の注解から収集している）。

- ・これは宣言文であり、通常の挨拶と同様に扱うべきではない（ブラウン）<sup>33</sup>
- ・これは同じような状況に置かれたヨハネの読者達を励ます機能を持つ（キーナー）<sup>34</sup>
- ・この伝統的なユダヤの挨拶は **peace be with you** とか **may all be well with you** といった以上の意味を持たないが、旧約での用例および新約・初期キリスト教での重要性に鑑みて、この文脈ではもっと多くのことが意味されている。復活の夜にキリストが使った平和は挨拶というよりも祝福、神の平和（終末的な平和）の宣言である（クリンク）<sup>35</sup>
- ・あたり前のような挨拶（**a routine greeting**）に思えるものに、14章等で約束したものが含まれている（マイケルズ）<sup>36</sup>
- ・この挨拶は「弟子たちの前でキリスト顕現に関する報告の古く重要な部分」（J・エレミアス）かもしれない。イエスの来臨と結合された平和の約束は今や成就し（2:14; cf. 7:50; 使 10:36）、伝統的な挨拶は形を変えられたのである（マーシャル）<sup>37</sup>
- ・ルカの物語では挨拶は付加的な響きがあるが、それはルカがイエスを、平和を告げる預言者という人々の期待に沿う存在として描いているからである（1:79; 2:14, 29; 7:50; 8:48; 19:38, 42; cf. 使 10:36）。弟子たちに現れた時、訪問する家の主人に挨拶するよう教えた、その仕方では挨拶している cf. 10:5-6）（ジョンソン）<sup>38</sup>
- ・ルカのペリコーペ（24:36-49）はもはや単なる主の顕現伝承ではなく、論争的・護教論的な位置付けをなされているのであり、素朴な疑問ではなく、よく考えられて洗練された懐疑論に対抗するためのものである（ドッド）<sup>39</sup>

しかし、これらの「特別な意味」は、これが「特別な挨拶」である、という前提、思い込みによるものではないのか。文脈に即して、改めて考えることが必要であろう。

## 4 考察

この挨拶の言葉がヘブライ語「シャローム」の翻訳であることは間違いないだろう。マタイは挨拶という用法を踏まえてギリシャ語で一般的な表現に意識したのに対し、ルカとヨハネは「シャローム」の表す意味である「平和」を直訳したと言えるかもしれない<sup>40</sup>。そうであれば、ルカやヨハネ、あるいはその用いた伝承はヘブライ語

をよく知らず、いわば辞書的な意味をそのまま用いたと言えるのではないだろうか<sup>41</sup>。それに対してマタイはその用法を知っていたことになるが、それはユダヤ人を対象として書かれたとされるマタイの背景とも合致するものと言えるだろう。

#### 4.1 単なる挨拶なのか、宣言なのか

「あなたがたに平和があるように」という表現は、単なる挨拶として用いられているのか、あるいは何らかの宣言的なものなのだろうか。ヨハネ福音書の注解者はこれを宣言とみなす(みなしたい)傾向がある。14章に「平和を与える」という宣言があることも関連している。しかし14章の表現に引きずられてこちらをも解釈している、という可能性もあるように考えられる。

では、単なる挨拶とみなすことを支持する証拠はあるのか。ここでは新約聖書およびヘレニズム書簡に見られる例を取り上げてみたい。

##### 4.1.1 新約聖書の例

新約聖書の書簡においては、「あなたがたに平和があるように」という表現は書き出しの挨拶として頻繁に用いられている。パウロは *χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη* 「恵みと平安があなたたちに [あるように]」という表現を定型的に用いている(ロマ1:7、1コリ1:3、2コリ1:2、ガラ1:3、フィリ1:2、1テサ1:1、フィレ3)<sup>42</sup>。また第2パウロ書簡もこれを踏襲している(エフェ1:2、コロ1:2、2テサ1:2、1テモ1:2、2テモ1:2、テト1:4)。公同書簡でも同様の挨拶が見られる(1ペト1:2、2ペト1:2、2ヨハ3、3ヨハ15、ユダ2)。「平和があるように」という挨拶の形式は、パウロ書簡(少なくとも50年代以降)において一般的であったといえる。

##### 4.1.2 ヘレニズム書簡の例

以下ではヘレニズム書簡に見られる、平和等を祈る挨拶の例を挙げよう<sup>43</sup>。

まず、第二マカベア書(前2世紀)では以下のようなものが見られる。

1:1 Τοῖς ἀδελφοῖς τοῖς κατ' Αἴγυπτον Ἰουδαίοις χαίρειν οἱ ἀδελφοὶ οἱ ἐν Ἱεροσολύμοις Ἰουδαῖοι καὶ οἱ ἐν τῇ χώρᾳ τῆς Ἰουδαίας εἰρήνην ἀγαθὴν

「エルサレムおよびユダヤの地に住むユダヤ人から、エジプト在住の兄弟たちに挨拶を送り、あなたがたの平安を祈る。」(新共同訳。下線は引用者による。以下同じ)

1:10 Οἱ ἐν Ἱεροσολύμοις καὶ οἱ ἐν τῇ Ἰουδαίᾳ καὶ ἡ γερουσία καὶ Ἰουδᾶς Ἀριστοβούλῳ διδασκάλῳ Πτολεμαίου τοῦ βασιλέως, ὄντι δὲ ἀπὸ τοῦ τῶν χριστῶν ἱερέων γένους, καὶ τοῖς ἐν Αἰγύπτῳ Ἰουδαίοις χαίρειν καὶ ὑγιαίνειν.

「エルサレムおよびユダヤの住民と長老会議およびユダから、油注がれた祭司部族出身であり、プトレマイオス王の師でもあるアリストブロス、およびエジプト在住のユダヤ人に挨拶を送り、あなたがたが健やかであるように祈る。」

9:19 Τοῖς χρηστοῖς Ἰουδαίοις τοῖς πολίταις πολλὰ χαίρειν καὶ ὑγιαίνειν καὶ εὖ πράττειν βασιλεὺς καὶ στρατηγὸς Ἀντίοχος.

「王であり総司令官であるアンティオコスより、善良なユダヤ人市民に深甚なる挨拶を送り、健康と繁栄を祈る。」

これらの例では、「挨拶する」と「平和・健康を祈る」という組み合わせが見られる。手紙の冒頭という限定された例ではあるが、挨拶において「平和」が用いられている例があることになる。

またその他の例として、エズラ記5:7ではダレイオス王への書簡の冒頭に、「ダレイオス王へ、大いなる平和をお祈り申し上げます」と述べている。シリア語バルク黙示録（1世紀後半）78:2には書簡の形式で、「恵みと平和〔があるように〕」と述べられる<sup>44</sup>。

もちろんこれらは書簡の例であり、福音書に見られる物語とは別物である、ということもできるだろう。しかし、紀元1世紀において、相手に平和を祈る挨拶は普通に行われていたことは明らかである。このことは、復活のイエスにおける平和の挨拶が普通の挨拶であることを支持しうる。

## 4.2 復活後のイエスの挨拶の意味

そもそも、このイエスの挨拶の言葉は史実だろうか。歴史的にこのようなことがあったとは言い難い。これはイエスの「復活」物語に含まれる部分であり、復活物語自体が多く伝説的要素を含んでいるからである。このような挨拶をイエスから受けた、と感じた弟子たちはいるのかもしれないが、客観的な検証にはとても及ばないだろう。またイエスの挨拶の言葉そのものについてもマタイおよびルカ・ヨハネで異なっており、イエスに関する史実として確実に伝承されてきたとは言えない。これらは伝承ないし福音書記者に由来するものと考えられる。

また福音書では、登場人物による「挨拶」自体もほとんど現れない。「ラビ」「先

生」のような呼びかけで始まる場合が多数である。イエスの公生涯において挨拶の言葉が記録されていないということは、復活物語におけるこれらの挨拶の特異性を際立たせるものともなっている。その点からも、これらの挨拶が特別な意味を持っていると推測される。

では、この挨拶が「おはよう」とか「こんにちは」程度の意であるとすれば、なぜこの挨拶が必要なのだろうか。これについては、この表現が「日常的に用いられていた挨拶」というところが鍵となるだろう。復活したイエスは、女性たちや弟子たちに出会ったときに、何事もなかったように「ごく普通の挨拶をした」ということになる。いわば、イエスはその死の前後で変わらないこと、死と復活の後でも日常性を示した、ということが出来る。これは復活という物語にとっては大きな意味があろう。復活後も特別な存在（体）になるのではなく、以前と同じであるというメッセージを伝えることになるのである。

福音書の復活物語においては、イエスの肉体が復活後に以前と変わらないことが主張される。以下の例では、とりわけイエスの肉体性が強調されている。

マタ28:9 「婦人たちは…イエスの足を抱き…」

ルカ24:39 「わたしの手や足を見なさい。…。触ってよく見なさい。」

ルカ24:41-42 イエスが魚を食べた

ヨハネ20章 マリアはイエスを「園丁」だと思う；手と脇腹を見せる

「亡霊には肉も骨もない」（ルカ24:39）が、イエスにはそれがある。ヨハネ福音書では手と脇腹を見せることで、十字架上で負った傷を強調しているが、ルカでは手と足を示すことにおいて、取り立ててそのような要素はない。マタイではイエスの「足」のみに言及されているが、これは幽霊には足がない、という考えを踏まえたものであろう。

これは、パウロが主張する復活における「霊の体」（1コリ15:44）とは異なるものである。パウロは肉体の体と霊の体を区別しているが、福音書の復活物語にはそのような（特別な）姿ではなく、普通の肉体を持った存在としてのイエスが描かれている。つまり、死の前の体と同じ肉体のまま復活したと考えられているといえるだろう。

肉体の同一性を強調することは、十字架の前後において肉体に変化がないことを示す。これはまさに「死」の無効化ということが出来るだろう。復活によって、「死」は肉体に影響を与えなくなったのである。このことから考えると、イエスから日常的な挨拶が行われることは、十字架の前後でイエスの体には変わらないことを示して

いるということができるとであろう。それは死の克服に対する確実な証拠とみなされるのである<sup>45</sup>。

#### 4.3 ルカとヨハネの依存関係？

先行研究でも指摘されているように、ルカの挨拶はヨハネ福音書から取り入れられたものであるという考えがある。これはどこまで妥当性があるだろうか。実際、ルカ24:36とヨハネ20:19の状況は酷似している。改めて示せば以下の通りである。

ルカ24:36 αὐτοῖς ἔστι ἐν μέσῳ αὐτῶν καὶ λέγει αὐτοῖς: εἰρήνη ὑμῖν.  
 ヨハネ20:19 ἦλθεν ὁ Ἰησοῦς καὶ ἔστι εἰς τὸ μέσον καὶ λέγει αὐτοῖς: εἰρήνη ὑμῖν.

すでに見た通り、現存する写本上の証拠からはルカの本文にもこれがあつたと言えるが、現存写本以前の本文についてもルカはこの部分を含んでいたのだろうか。

これを考える際に注目すべきなのは、ヨハネ福音書では20:21でこの表現が繰り返されていることである。この繰り返しは、ルカ福音書には見られず、ヨハネ福音書だけに見られるものである。もしルカがヨハネから写したと考える場合、ルカはヨハネに2回あるものを1回だけ写したことになる。ヨハネが2回繰り返しているのはやや不自然ともいえるため、ルカはより洗練した表現にしたとも考えられる。しかしイエスのこの平和の挨拶が重要なものとみなしていたのであれば、2回そのまま写すことも十分考えられるだろう。現在のルカの本文では挨拶は1回だけであるから、ルカはそれほど重要なものとは見なさず、1回だけ使ったと言うこともできるだろう。すると、この挨拶そのものは比較的軽いものであるということになる。繰り返しになるが、実際にはルカとヨハネは共通の復活物語伝承を別々に受け取り、それぞれ記したと考えるのが妥当であろう。

またこの繰り返しは、ヨハネ福音書ではどういう意味を持っているのだろうか。これは、続く表現「あなたたちを遣わす」からも、告別説教との関連を強く示唆するものとなっている。その点で、14章に約束された平和との結びつきが強いと言えるかもしれない。すると、同じ表現ではあるが、19節は単なる挨拶、21節は宣言的なもの、と区別することもできるかもしれない。ただし *πάλιν* の存在には注意すべきであろう。*πάλιν* 「再び」という繰り返しを強調する語があるゆえに、21節のみならず19節についてもやはり宣言である、という可能性もありうるかもしれない。

## 5 おわりに

復活のイエスの挨拶は、史実とは言えないが、復活物語の中でも意味を持っている。それは、イエスの肉体性が十字架死の前後で「変わらない」ことを示すためのものである。であれば、「平安あれ」のような宣言ではなく、むしろ通常の挨拶の意味として理解すべきものであると考えられる。

\* 本論文は第60回西日本新約聖書学会（2019年6月16～17日開催、於関西学院大学大阪梅田キャンパス）での口頭発表に加筆修正したものである。

### 注

- 1 現在まで伝えられている写本に基づけば、16:8以下は後代の付加とみなすのが妥当である。なお16:9-20はマタイ・ルカ・ヨハネから再構成された顕現物語であれば、そこにはイエスが弟子や女性たちに出会ったことが記されているものの（16:9, 12, 14）、挨拶の言葉は述べられていない。他の3福音書からの要約とはいえ、復活のイエスの挨拶がそれほど重視されていないことの傍証になるだろう。
- 2 田川はここに註をつけ、これは普通の挨拶とみなすべきと述べている。
- 3 シュヴァイツァーは、マタイ28:9の挨拶は（26:49と同じく）ギリシャ語で普通のものだと指摘しつつ、ヨハネ20:19と20:26にはヘブライ語・アラム語で普通の「平安」を含んでいる、と違いを強調する。ただしそれ以上議論を深めてはいない（E・シュヴァイツァー、佐竹明訳『マタイによる福音書』（NTD 新約聖書註解2）NTD 新約聖書註解刊行会、1978年、729頁）。
- 4 なお χαίρω はマタイにおいて6回用いられ、「喜ぶ」の意味で3回（2:10, 5:12, 18:13）、挨拶として3回用いられている（26:29, 27:29, 28:9）。他の三つの福音書でも用いられているが、ほとんどは「喜ぶ」意味であり、挨拶として用いられるのはマルコ15:18＝ヨハネ19:3、ルカ1:28のみである。
- 5 ルツは、この挨拶が重要であることを指摘し、かつそれはギリシャ語で「あなたたちは喜ぶ」という意味であり、それが8節の「大きな喜び」をさらに深めるものであると述べている（ウルリヒ・ルツ、小河陽訳『マタイによる福音書』（EKK 新約聖書注解 I/4）教文館、2009年、507頁）。ルツはヘブライ語の含意を考慮せずギリシャ語から考察しているが、イエスがこの場面においてギリシャ語を用いて挨拶したという根拠は示していない。なおイエスがギリシャ語を用いた可能性について、土岐は都市のみでなく地方、ガリラヤの住民でもある程度ギリシャ語を用いることができたと推測する（土岐健治・村岡崇光『イエスは何語を話したか？』教文館、2016年、45頁）。またグリーヴスはイエスや主要な弟子たちはギリシャ語を話せたと論じ、福音書がアラム語資料を用いていたという通説を批判する（Gleaves, G. Scott. *Did Jesus Speak Greek: The Emerging Evidence of Greek Dominance in First-Century Palestine*. Eugene, Oregon: Pickwick Publications, 2015, esp. 182-186）。
- 6 田川によれば、これはヨハネからの持ち込みである、というより、後代の写本が取り込んだのであってルカのオリジナルではない、という（田川建三『新約聖書訳と註 第二巻上 ルカ福音書』作品社、2011年、502頁）。
- 7 英語訳では be 動詞を原形（be）で補う。なお ESV では “Peace to you” と動詞を補わずに訳出している。

- 8 この部分を含まない翻訳として、例えば K・H・レングストルフ、泉治典・渋谷浩訳『ルカによる福音書』（NTD 新約聖書註解）、NTD 新約聖書註解刊行会、1976年、595頁がある。ボヴォンは *καὶ λέγει αὐτοῖς* という歴史的現在の形式はルカ的ではなく、またルカが挨拶としては *χαίρω* を好んでいる（1:28、また使15:23, 23:26）として、この部分がルカに由来しないことを暗示している（Bovon, François, *Das Evangelium nach Lukas*, EKK III/4, Neukirchen-Vlunn/ Düsseldorf: Neukirchener/Patmos, 2009, 578）。
- 9 *it*<sup>a, b, d, e, ff2, l, r1</sup>
- 10 Dauer, Anton. *Johannes Und Lukas: Untersuchungen Zu Den Johanneisch-Lukanischen Parallelerikopen Joh 4, 46-54/Lk 7, 1-10 - Joh 12, 1-8/Lk 7, 36-50, 10, 38-42 - Joh 20, 19-29/Lk 24, 36-49*. Würzburg: Echter Verlag, 1984, 223-4.
- 11 Carroll, John T. *Luke: A Commentary*. Louisville, Kentucky: Westminster John Knox Press, 2012, 489.
- 12 Omanson, Roger L., and Bruce M. Metzger. *A Textual Guide to the Greek New Testament: An Adaptation of Bruce M. Metzger's Textual Commentary for the Needs of Translators*. Stuttgart, Germany: Deutsche Bibelgesellschaft, 2006, 156.
- 13 Fitzmyer, Joseph A. *The Gospel According to Luke: Introduction, Translation, and Notes*, Garden City, N.Y.: Doubleday, 1981, 1575.
- 14 Edwards, James R. *The Gospel According to Mark*. PNTC, Grand Rapids, Mich.: Leicester, England: Eerdmans; Apollos, 2002, 728-9.
- 15 Wilkens, Ulrich. *Resurrection: Biblical Testimony to the Resurrection: An Historical Examination and Explanation*. Edinburgh: St. Andrew Press, 1977, 44-48, 50. 拡大の段階として、1) マタイが番兵やユダヤ人指導者たちの物語を伝承から取り入れた；2) ルカとヨハネが共通の伝承から復活物語を拡大した：ペトロが墓を見に行ったというルカの物語を、ヨハネが愛弟子も墓を見に行ったとさらに拡大した；3) マタイとヨハネが墓での女性たちの場面を拡大した（ヨハネではマグダラのマリアが現れる）を挙げている。
- 16 これはマタイ10:12の異読にも見られるが（聖書協会共同訳・新共同訳・新改訳2017のいずれも異読を説明なく採用している）、主に西方系の写本に支持されており、ルカの異読が入り込んだものと考えられる。
- 17 Dauer, 261.
- 18 Nolland, John. *Luke*. Dallas, TX: Word Books, 1989, 1212.
- 19 口語訳聖書において、ルカでは「やすかれ」だが、ヨハネでは「安かれ」と表記が異なる。
- 20 ヨハネ福音書の当該箇所については、田川の註はない。
- 21 たとえば Hagner, Donald Alfred. *Matthew 14-28*. Dallas, Tex.: Word Books, 1995, 874.
- 22 Nolland, John. *The Gospel of Matthew: A Commentary on the Greek Text*. Grand Rapids, Mich.: Eerdmans, 2005, 1252.
- 23 Osborne, Grant R., and Clinton E. Arnold. *Matthew*. Grand Rapids, Mich.: Zondervan, 2010, 1068.
- 24 Michaels, J. Ramsey. *The Gospel of John*. Grand Rapids, MI: Eerdmans, 2010, 1008.
- 25 Dauer, 223.
- 26 Zumstein, Jean. *L'Évangile Selon Saint-Jean (13-21)*. Commentaire du Nouveau Testament; 4b Geneve: Labor et Fides, 2007, 758.
- 27 Heil, John Paul. *Blood and Water: The Death and Resurrection of Jesus in John 18-21*. Catholic biblical quarterly. Monograph series; 27 Washington, DC: Catholic Biblical Association of America, 1995, 135-6.

- 28 Omanson, 156.
- 29 Haenchen, Ernst, Robert Walter Funk, and Ulrich Busse. *John: A Commentary on the Gospel of John*. Hermeneia: a critical and historical commentary on the Bible Philadelphia: Fortress Press, 1984, 2:210.
- 30 Dodd, C. H. "The Appearances of the Risen Christ: An Essay in Form-Criticism of the Gospels." in: *More New Testament Studies*. Grand Rapids: Eerdmans, 1968. 105.
- 31 Bernard, J. H., and A. H. McNeile. *A Critical and Exegetical Commentary on the Gospel According to St. John*. New York, NY: C. Scribner' Sons, 1929, 673.
- 32 Thompson, Marianne Meye. *John: A Commentary*. Louisville: KY: Westminster John Knox, 2015, 419.
- 33 Brown, Raymond Edward. *The Gospel According to John*. Garden City, N.Y: Doubleday, 1966, 1021ff.
- 34 Keener, Craig S. *The Gospel of John: A Commentary*. Peabody, MA: Hendrickson, 2003, 12.
- 35 Klink, Edward W. *John*. Grand Rapids, MI: Zondervan, 2016, 859.
- 36 Michaels, 1008.
- 37 Marshall, I. Howard. *The Gospel of Luke: A Commentary on the Greek Text*. NIGTC, Exeter: Paternoster Press, 1978, 901.
- 38 Johnson, Luke Timothy., and Daniel J. Harrington. *The Gospel of Luke*. Collegeville, Minn.: Liturgical Press, 1991, 400.
- 39 Dodd, *Appearance*, 112.
- 40 トロンプフは、マタイにおける挨拶の言葉がルカやヨハネに見られるものと合わないことの説明として、マタイが(ゼファニア書3:14 LXXの記述も踏まえて) *χαίρετε* に修正したのではないかと考える (Trompf, G. W. "The First Resurrection Appearance and the Ending of Mark's Gospel." *New Testament Studies* 18 (1971), 320)。
- 41 アルサップは本来の伝承(マルコの失われた顕現物語に記されていた)では *χαίρετε* であったと考え、マタイはマルコの(失われた)伝承をそのまま記したのに対し、ヨハネはすでに *εἰρήνη ὑμῖν* に書き直されていた伝承を受けとって記したと考えている (Alsup, John E. *The Post-Resurrection Appearance Stories of the Gospel Tradition: A History-of-tradition Analysis; With Text-Synopsis*. Stuttgart: Calwer-Verlag, 1975. 113)。
- 42 小林はパウロ書簡におけるこの定型的表現の文化的背景を論じ、*χάρις* は *χαίρειν* との言葉遊びになっているギリシャ・ローマ世界の挨拶、また *εἰρήνη* はヘブライ語「シャローム」の訳語でユダヤ世界の挨拶であるから、「恵と平安」というパウロの定型的挨拶は祝祷ではなく、二つの世界の挨拶を融合させた修辭的挨拶であると論じる(小林昭博「挨拶の文化的影響：*χάρις ὑμῖν καὶ εἰρήνη* の文化的背景」『神学研究』(関西学院大学神学研究会) 57号(2010年) 29-39頁)。
- 43 なお本項では Klauck, Hans-Josef., and Daniel P. Bailey. *Ancient Letters and the New Testament: A Guide to Context and Exegesis*. Waco, Tex.: Baylor University Press, 2006を参照した。
- 44 Charles, R. H. *The Apocrypha and Pseudepigrapha of the Old Testament in English, With Introductions and Critical and Explanatory Notes to the Several Books*. Oxford: The Clarendon Press, 1913による私訳。村岡による邦訳は「憐みと平安がきみたちにあるように」(村岡崇光訳「シリア語バルク黙示録」日本聖書学研究所編『聖書外典偽典5旧約偽典 III』教文館、1976年、145頁)。本文書の成立年代について、村岡は紀元1世紀後半を想定している(同、76頁)。
- 45 なお文芸批評的研究では、イエスという登場人物のキャラクターは変化しないものと分析されることが多い。死を超えても変わらないイエスの姿は、このような変化しないキャラクターという点にも当てはまるものである。